



↑こちらのコードから色鮮やかなカラー版をご覧ください。

(5月1日以降)



水谷公民館だより

編集 水谷公民館だより編集委員会
発行 富士見市立水谷公民館 富士見市水谷1-13-6
TEL049(251)1129・FAX049(255)9886・fkm-mi@coral.ocn.ne.jp

母の日特集 母の想い出

ゴールデンウィークが明けると、恒例の母の日がやってきます。そのルーツは各国さまざま。古代ローマでは女神リリアに感謝する春祭りだったとか。広く知られているのは、アメリカの女性活動家アン・ジャービスの娘アンナが亡き母を偲び、教会で白いカーネーションを配ったのが始まりと言われています。日本では始めて母の日のイベントが行われたのは、大正時代。亡くなった母親へは白いカーネーションを、健在の母親には花言葉「母への愛」の赤いカーネーションを贈ります。母の日にちなみ、それぞれの母への想いをしたためました。

男5人を育てた母

母は私と同じ子年生まれです。ゆえに何時でも母の年齢は間髪入れず答えることができました。そんな母も亡くなったから早いもので二十四年がたちます。今思えば男ばかり5人の子どもたちを育てるといことは、大変だっただろうし苦労をかけたのだろうなとつくづく思います。口に出したことはありませんが、きつと「女の子が一人でもいたら！」と思うことが、しばしばあったに違いありません。母の日常は、子育てばかりでなく、畑など野良仕事に明け暮れる毎日でした。さらに、和裁の技術を活かして、裁縫を教えたり、着物の仕立てを頼まれたりして家計も支えていました。それを思うと「ただひたすらに感謝あるのみ！」です。

一方脳裏に残る一番の思い出と言えば、小学一年生の授業参観の出来事です。お母さんを題材にした作文の中で母が怒る

ずつと幼い頃のある日、普段は上からもんぺをはいて家事をしていた母がよそ行きの着物に着替えて出かけようとするのに、気が付き、泥んこ遊びの手

母の着物姿

私が幼かった頃の母は着物を着ていることが多く、その着物姿が好きでした。今思えば、裕福でない父に嫁いだ母は洋服を買わずに嫁入り支度で持ち込んだ多くの着物で日々を送っていたのかもしれない。授業参観などは洋服で来ていたのだから、母にとっては洋服が貴重なものだったの



(萩元編集委員)

らしがみつきました。言うまでもなく着物は汚れ……。この後、母が着替えて出かけたのか、私は連れて行ってもらえたのか、そのあたりは全く記憶にないと、この話は後々姉兄から聞いたものなのかわかりません。おとんば(故郷では末っ子をそう言います)だからか、母から叱られた記憶は殆どありません。この時も子守りを言いつかっていたであろう姉兄が叱られたのやも知れませんが、ごめんなさい。

(大槻編集委員)

母の励まし

母は昭和二十五年に結婚し、翌年私が生まれました。小さい頃の私は病弱で、母に連れられて病院へ頻りに通いました。特に頭に沢山の吹き出物ができ、最後に残った痕に髪の毛が生えず、十円玉の大きさの禿となりました。そのことで、近所の子ども達からいじめられました。母はその子らを叱りつけた後、一度私をギュッと抱きしめてくれました。



私は中学校に上がる時、校則に「男子は丸坊主にすること」から、隣の中学校を希望しました。しかし、母は小学時代の友達と中学時代も一緒に過ごし、身体的な傷で負けない強い心を持つ子にしたいから反対しました。結局、母の意向で、この中学校に入学しました。登校を始めた頃は、この事で辛い日々が続きました。母の思いと励

まして、三年間通学することが出来ました。今では当時の出来事が楽しい思い出となると共に、充実したシニアライフにも繋がっています。母への感謝で一杯です。

(細谷編集委員)

母とイマジジン

私の母は結核に感染していたため、私を産むとすぐ入院してしまいました。私の小学校入学時にやっと退院してきました。私は、もらい乳をして祖母と父に育てられました。父母と父に育てられましたが、甘やかされてかなりわがままだったと思います。小学校入学と同時に祖母の家から10分程離れた新居で親子3人だけの暮らしが始まりました。甘やかされて育った私への母の教育が始まりました。厳しかったこととは言うまでもありません。そんな母ですが、私が高校生になると、家事は強要しなくなり、多分勉学に励めということなるとなりました。母は勝手に思っていました。母の料理は私より孫の娘へと引き継がれました。母と二人で住んでいました。

ある時テレビでジョンレノンのイマジジンが流れていたそうです。母が娘に「イマジジンってどういう意味？」と聞いたそうです。娘は「想像してごらん」と答えて「いいじゃん、教えてよ」と母が言ったとのこと。イマジジンを聴いたとき母を思い出します。

(佐々木編集委員)

セピア色の写真

冒頭からこの文章ではと躊躇しました。でも母についてはこれからは書かないと前に進みません。母は私が生後9カ月の時に亡くなったと聞きました。幾つもの時間聞きたか覚えてはいません。私は、母方の親戚にお世話なり、75歳のこの歳まで大きな病氣もせずスクスクと育ちました。

父のこともここに少し書かなければなりません。父は初対面の後、一週間後に癌で亡くなりました。母は綺麗な人だったとは聞いていました。辛うじてセピア色の写真が一枚あり大事に仏壇に飾ってあります。手前みそですが綺麗でした。丈夫な体をもらい今更ながらですが感謝しています。御両親健在の皆さんお母さんも大切に。

(河野編集委員)

お母さん、美人ね！

母は近所で美人のほまれ高き女性でした。「お母さん、美人ね！」その言葉の裏を意識するようになったのは、何歳くらいだったでしょう。チクリと感じるものを抱きながら育った私でしたが、そんなことはどうでもよい年齢になりました。女性が専業主婦であることが当たり前な時代、母は

皆さんは編集委員の母の思い出の記事を読み、編集委員と同じように母の思い出に浸かっていただけかと思つていました。私にとつての母との思い出は多々ありますが、闘病に苦しんでいた時の思い出は殆どなく、結婚式や娘のお稚児さん等の写真のように何時も微笑んでいた思い出ばかりが浮かんでいきます。

(辻編集委員)



〜おわりに〜

職業婦人でした。現役を退き、高齢になってもハイヒールを履きこなしお洒落して、デパートのレジをするのが日常でした。駅の階段で転び、硬膜下血腫が原因で次第に介護が必要になってからも、「お出かけ」癖は留まるどころを知らずにお付き合いもイヤでなかった私。その遺伝子を受け継いだのは、ほぼ間違いのないことです。とは言え母は数字に強く、私はからきし弱い。90%正反対の母娘ですが、今となつては「一緒にデパートへ出かけた日よ、再び…」などと、母の日を前に懐かし

(柴田編集委員)